

はカロースは検出されない。ヤブランでは、両母細胞とも第 1 分裂がすすむにつれ、カロースの沈着は壁全体に拡大し、カロースの検出されない壁の部分はみられない。小胞子の形成過程でも大胞子のそれでも、2 分子や 4 分子の各細胞の壁全体からカロースが検出される。大胞子形成過程の母細胞と 2 分子や 4 分子の各細胞がカロース壁で完全に囲まれる例は、ヤブラン以外ではまだ知られていない。

大胞子の形成を終了した雌性配偶体形成過程からは、カロースの検出は全くできない。一方、ばらばらになった小胞子からは一時的にカロースを検出できなくなるが、その後の雄性配偶体形成過程ではカロースの検出される時期がある。花粉中の生殖核と栄養核を分ける細胞壁にカロースが沈着する。ヤブランでは生殖細胞が花粉壁を離れる前に、このカロースは消え、生殖細胞をカロース壁が囲むことはない。今までに調べられた植物では、生殖細胞は花粉壁を離れてからもカロース壁で囲まれている。生殖細胞の壁にカロースが沈着している時間的長さには変異があると思われる。裂開前の葯の中にある花粉の発芽溝の一方の極付近にカロースの顕著な集積がみられる。Currier (1957) もこの集積を報告しているが、ほかには報告がなく、今後の調査を必要とする。寒地培地の上で成長中の花粉管の壁にもカロースが沈着するが、先端部約 20 μm からはカロースは検出されない。

被子植物の胞子及び配偶体の形成過程でのカロースの消長には多様性が認められる。このカロースの消長様式の情報を加えることによって、発生学は今まで以上に系統学や分類学に役立つ情報を提供できるようになるとと思われる。

○ケハギの白花型ユキハギ (秋山 忍・大場秀章) Shinobu AKIYAMA & Hideaki OHBA: A white-flowered form of *Lespedeza patens* Nakai

ケハギの白花型を山崎富佐子氏が新潟県小千谷で採集された。このハギに対し、山崎敬博士はユキハギの和名を用意された。小千谷周辺で稀に栽培されている。ケハギの白花型には茎に伏した毛のあるシロバナタヤマハギ *L. Thunbergii* (DC.) Nakai var. *acutifolia* (Nakai) Hiyama ex Murata f. *leucantha* Murata があるが、これはケハギとは異なる。詳しいことは別の機会に発表したい。ユキハギの材料の提供と生育地の状況等について御助言をいただいた山崎敬博士にお礼申し上げます。

Lespedeza patens Nakai f. **nivea** S. Akiyama et H. Ohba, f. nov.

Haec forma ut typo caules pilis patentibus habet sed a typo floribus albis differt.

Nom. Jap. Yukihagi (Yamazaki, nov.).

Habit. Japan. Honshu: Niigata Pref., Ojiya (Fusako Yamazaki s. n. 20 Sept. 1966, Holo- et iso-typi in TI).

(東京大学 総合研究資料館植物部門)